

るものであり、これによって教会の働き全体が大きく広がるのである。したがって、司祭  
信徒奉仕職の実施は、刈り入れのための働きをこれまでにも増して大きく広げようとす  
割もいっそう重くなるのであって、ともに新たな課題に応じていかなければならない。

の役割)で述べたように、信徒の役割が重くなることは、それを支える司祭や修道者の役  
になる、というように理解してはならない。むしろ、1. 3) (次)のことのできない司牧者  
味している。すなわち、信徒奉仕職の推進は、どちらか一方の役割が重くなれば他方が軽  
って、どちらか一方だけの努力で実現できるものではない、ということ、次のことを意  
また、信徒奉仕職の促進には信徒と司祭や修道者との間の理解と協力関係が不可欠であ  
現れてきている」(P171)のである。

り入ト教の周辺で求められ、(中略)現代都市の多くのカタクソフのなかで新しい方法で  
めにいのちを捨てる P170)。「教会が年々空になっていくとき、奉仕職の新しい形態がキ  
ない大勢の若者たちによって、たいへんな敬意をもってふたたび使われている」(友のた  
のことばが、今日教会に行こうとかキリスト教の奉仕者に相談しようなどは決して考え  
なわち、ハンリ・サウエンは次のように警告している。「精神の集中、黙想、観想など  
両者の協力関係が実現しなければ、この言葉は決して誇張として終わらないだろう。す  
教会にとって一種の「死」を意味することになるだろう。

ても信徒が応えなければ、彼らを殺してしまうことになる。このような状態は、いずれも  
今後も続く」だろう(信徒を中心とした教会 P86)。反対に、司祭や修道者だけが意識し  
外での奉仕にだけ献身して、最も優れた人々が教会から出ていってしまうことが、  
とは離れたところで働くしかなくなってしまう。「信徒奉仕者たちが教会のコントロール  
中で実現するものである。信徒だけが努力し司祭や修道者が協力しなければ、信徒は教会  
このように、信徒奉仕職の促進は、教会共同体における信徒と司祭や修道者との関係の

### b. 信徒司祭間の緊密な協力

- ① 教会の存在は、自己目的とされるのではなく、世に奉仕するものとしてある。
- ② 世に奉仕する役割は、信徒・修道者・司祭が等しく責任を担っている。
- ③ 信徒・修道者・司祭がそれぞれ担う責任は対等であるが、果たす役割は異なる。
- ④ 主に、信徒は直接社会と関わり、司祭は信徒を支えることによって奉仕する。

め方が大切である。  
たのであるから、信徒奉仕職を促進するには、そのような新しい教会理解にもとづいた進  
り方などにおいて根源的な刷新が行われた。信徒奉仕職もその中で新たに位置付け直され  
第二バチカン公会議によって、この世界における教会のあり方や教会共同体の組織のあ  
渡ったとはいえないだろう。したがって、信徒奉仕職の促進に当たっても、まず新たな教  
会理解を引き続き徹底させていくこと、すなわち単に知識としての理解に留まらず、実際  
の行動に結びついた理解にいたるよう絶えず回心することが、その前提として非常に重要  
である。この点について特に留意しなければならない項目としては、次のような諸点があ  
るだろう。

### a. 意識の刷新

## 3. 信徒奉仕職促進のための課題

### 1) 教会の基本的なあり方